法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-27

〈重友毅教授追悼〉一九五六・七年の頃 : 重 友教授のことなど

東,喜望 / AZUMA, Yoshimochi

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文學誌要

(巻 / Volume)

24

(開始ページ / Start Page)

107

(終了ページ / End Page)

110

(発行年 / Year)

1981-02-04

(URL)

https://doi.org/10.15002/00019307

へ重 友 毅教授追悼〉

九五六・七年 頃

重友教授のことなど

責任校を引受けて欲しい旨、準備校(立命館大)から要請があった. 第三回全日本学生文学ゼミナール大会・日本文学部門近世部会での 討議の結果、 ミナール委員会という学生の自治組織があったが、この委員会に、 ところが、どのゼミがこの任を負うかが問題と なり、 委員会で 思ひ出づるままに、二、三のことを記しておきたいと思う。 あれは、昭和三十一年の夏のことであった。当時、文学部にはゼ 結局、 法政が報告をも引受けざるを得ない羽目になった。 委員会ではこれを承認したが、報告担当校が仲々決ま

称する選択ゼミとがあった。三、四年生は、全員Aゼミのいずれか な呼び方をしていたが、ただ、Aゼミと称する必修ゼミとBゼミと 形式で行なわれ、一般に授業科目名も「昭和文学ゼミ」というよう 近世関係のゼミにこの件を図った。当時は、授業の大半が演習 近世関係 が庶民(町人)に移ったこと、庶民の解放的な精神の 原質が「傾 き」にあることなどを順々に説かれ、その後、 かえた紫の風呂敷包みから西鶴や近松の原本を出されて、 総長室、二階は理事・後援会室になっていたからである。小脇にか いことですな」などと冗談をいわれた。新館は各階一室で、一階は それにしても、 ておきたい た。近世文学についての本格的な勉強をさせていただいた、このゼ ながら、中世の分権的封建社会が崩壊し、近世に到って文化の中心 を閉めさせた。 先生は新館 (正門右脇に在った) 三階の教室に入ると、必ずドア おかみ(大学経営者)の頭上でゼミをやるのは面白 「最近はゼミを廊下で盗聴する理事がいるそうだ。 学生の報告に移っ

つに属していなければならぬというシステムである。

委員会はAゼミに、如上の件を図った。当時は、

東 喜 望

か参加していなかった。余談になるが、若干このゼミについてふれ

の属していた、近藤忠義先生の「諸国咄ゼミ」でも十数名の学生し

のAゼミといっても、二つほどしかなく、参加学生も少なくて、私

ミのことは生涯忘れることができない。

近世関係は一授業のみであった。

近世関係は一授業のみであった。「近松」を報告してはどうかという先生からの提案もあったが、四年生諸兄が卒論準備のため不可能方先生からの提案もあったが、四年生諸兄が卒論準備のため不可能担当に関しては消極的であった。「近松」を報告してはどうかといる。「近松」を報告してはどうかといる。「近松」を報告してはどうかといる。「近代」を報告してはどうかといる。

あって、 だと思った。 たのは、 なった。委員長永井時彦君(三年)から、教授への依頼の命を受け 会をつくり、その指導・助言を重友教授にお願いするということに よりも期日が迫っていたので、 決定した。同年十月中旬のことである。だが、Bゼミという性格も 作品の解釈に主眼がおかれていたよ うに 思 う。ゼミ委員会は、結 の雨月物語をとりあげ、ゼミと講義を併用して授業を進めていた。 私どもが同教授に初めて接したのもこの年であるが、教授は、 のが重友毅教授 (武蔵大教授・昭24年法大兼任。二部主任) である。 同年四月、 全日本学生文学ゼミ・近世部会に、 同級の花村国弘君と私である。卒直にいってしんどいこと 「雨月ゼミ」には、各時代の専攻学生が参加しており、何 初めて昼間部に出講して、このBゼミを担当していた 「全日本」に向けての報告準備研究 『雨月』を報告することに 秋成

向から長い田舎道を、西日に照らされながら花村と私はとぼとぼ歩その週末であったか、日曜日の午後、西武線豊島園から春日町へ

えた。書生かと思った。だがのちに聴けば、ご令息であった。しょうか」と言う。学生も反射的に「はい、先生おいでです」と答出てきた。ぼくらはびっくりして、咄嗟に「あのー、先生おいでで漸く尋ね当てて、案内を請うと早稲田の詰襟を着た学生が裏手からいていた。勿論、急務とあって、教授の自宅を訪ねるためである。

談長をお願いした。 似後、毎週二回ほど、ぼくらは報告準備のための研究会を持っ以後、毎週二回ほど、ぼくらは報告準備のための研究会を持っ以後、毎週二回ほど、ぼくらは報告準備のための研究会を持っ

こうして、同年十二月十五、 六の両日、同志社と立命館大学で開

に抑えられたのも事実である。 に抑えられたのも事実である。

大文学者だからだとする。かくて、源内や馬琴などをはじめとするた文学者だからだとする。かくて、源内や馬琴などをはじめとするない。だが、作品にかかわる主体の問題が問われぬのだ。教授はよるた次元にまで評者が成長していなければ不可能だ」といわれた。そのものにつくべきことを強く主張された。そのこと自体に異論はた文学者だからだとする。かくて、源内や馬琴などをはじめとするも評された。その理由は人間をその深みに於いて追究した、すぐれた文学者だからだとする。かくて、源内や馬琴などをはじめとするを担て、近世に於ては、一に西鶴、二に芭蕉と近松、三に秋成だとるに次元にまで評者が成長していなければ不可能だ」といわれた。

教授に於ては、西鶴・芭蕉らは絶対的な存在として位置づけら

めにも、作品を主体的に読みなおしてゆく必要があったのだ。いうことになる。劣等生の「柔軟自在な」発想など一撃の下に否定いうことになる。劣等生の「柔軟自在な」発想など一撃の下に否定がれ、それらの古典を読むということは、読者がいわば「聖」にぬかれ、それらの古典を読むということは、読者がいわば「聖」にぬかれ、

教授は長州萩のご出身で、軍人の家に生立たれたと聴く。厳格な人柄はここに由来するのであろうか。一高・東大では片岡良一教授人柄はここに由来するのであろうか。一高・東大では片岡良一教授と同期であったという。機会あって「文芸復興」(昭12)に寄せた教芸術道において追究された学者であろう。学生にとっては、近寄りの深さに、私たちは教えられた。今は亡き教授の在世中に、近世のの深さに、私たちは教えられた。今は亡き教授の在世中に、近世の方芸が根源的に含み持つ転合や悪戯の精神をどう評価するかというでまが根源的に含み持つ転合や悪戯の精神をどう評価するかというの深さに、私たちは教えられた。今は亡き教授の在世中に、近世の方法が根源的に含み持つ転合や悪戯の精神をどう評価するかというの深さに、私たちは教えられた。今は亡き教授の在世中に、近世の方法が根源的に含み持つ転合や悪戯の精神をどう評価するかというというでは、近のでは、近路りの深に生立たれたと聴く。厳格なる。やはりがなくたちは非力だったのかも知れぬ。

が、神田や本郷の古本屋を捜し廻ってもどうにも入手で きな かっり組まねばならなかった。資料の一つとして『秋成遺文』を求めた翌三十二年、私たちは教育実習等に忙しく追われながら卒論に取

小立の林間をゆきながらなぜか涙がこぼれた。
いたのは、おい余って、ある日、六角校舎の階段を教場へ向かう重友教授に、借用を申し出た。「そんなことは指導教授に相談したまえ」とに、借用を申し出た。「そんなことは指導教授に相談したまえ」といかの原本が書棚一ぱいに並んでいたのが忘れがたい。帰途、杉や白話の原本が書棚一ぱいに並んでいたのが忘れがたい。帰途、杉や白話の原本が書棚一ぱいに並んでいたのが忘れがたい。帰途、杉の立の林間をゆきながらなぜか涙がこぼれた。

月卒の意〉なる同窓会を結成したが、未だ再開しないままである。業コンパの席上、日向野克巳君の提案で、ぼくらは三三会〈33年3後である。(その夜、小原元先生を囲み、浅草・菊水で開かれた卒ま、ぼくらは掃き出されるように校門を出た。冷い雪の降り続く午をれから二ヶ月の過ぎた三月二十八日、殆どが就職も決まらぬま